基礎看護学実習において看護学生が患者像を描く過程の特徴

伊尾喜恵　（基礎看護学）

【キーワーズ】　基礎看護学実習・看護学生・患者像・看護過程

本研究の目的は，実習指導上の示唆を得るために，基礎看護学実習において学生が患者像を描く過程の特徴を明らかにすることである。研究対象は，4年制大学2年次の基礎看護学実習において，研究者が直接指導を行った学生のうち研究協力の同意が得られた学生3名である。研究方法は，研究対象者の実習等記録，研究者の実習メモ，学生へのインタビュー内容から，実習日程に沿って学生の看護過程を再構成した。各学生の看護過程から，学生の認識の特徴を取り出し，学生が描く患者像がつくりかわる契機に着目し，その局面ごとに，学生が描いた患者像を抽出した。さらに，各学生が患者像を描く過程を抽出した。

【学生A】既習内容と自己学習から，病気の特徴と部位，現在の回復の段階を描き，患者の思いや日常生活等は不明確と自覚した。突然障害を負った患者の思いを想像し，患者は自己の運動機能の低下に着目していると捉え，意図的に持てる力を描いた。患者が自身の回復する力を感じられるように関わり，患者の運動機能や思いの変化を捉え，患者の満足感が高まるように具体的な関わりを描いた。

【学生B】病気の原因や症状を描くが，具体的な患者の状況はイメージできなかった。患者の反応から，患者は意思表示が困難で他者からの援助を要すると捉えた。過去の神経難病患者との関わりを想起し，患者の思いへの関心が高まり，患者の反応とその時の関わりから振り返りを重ね，追体験や，面会やケア時の反応から患者の思いを描いた。患者の意思表示が可能という持てる力を捉え，患者が持てる力を発揮でき，QOLの向上につながるという目標像を描き，そのために今の生活を整え，消耗させてはならないと描いた。

【学生C】病気や症状などの情報が断片的で繋がらないと感じ，患者と関わり，事実を捉え，患者の願いを把握した。カンファレンスをきっかけに，自分の関わりや看護計画を振り返り，患者の情報のつながりを描いた。そして，患者の思いと運動機能の対立を見出し，調和を図ろうと考えつつ，患者の現在の複雑な思いを描き，思いを尊重しながら関わることが必要と描いた。

以上より，次のような実習指導上の示唆を得た。

指導者は，学生の表現から，学生が知り得た事実からどのように患者像を描こうとしているかを読みとり，学生自身が自己の患者像を意識できるように関わる。その時に，学生が患者のからだとこころと社会関係のつながりと，その変化のプロセスが描けるように意識しながら関わる。学生自身が患者との関わりを重ねながら，看護の方向性を見出し，実践につなげるためには学生自身が描いている患者像を客観視し，自ら患者像をつくりかえていけるように関わる。